
蟻と爪

金魚さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蟻と爪

【Zマーク】

Z6488C

【作者名】

金魚さん

【あらすじ】

僕さあ、最近悪夢を見るんだー！とつても、気持ちが悪い夢。え？聞きたいの？止めときなよ。どうしても？実は僕が思い出したくないんだ。そこを何とか？…じゃあ君は、聞いても後悔しないね。うん。そなんだよね。

(前書き)

グロいつす。自分的には、よく寝る前にこんなものがかけたと、自分でも驚いています。そんぐらい、グロイです。
ただただ、グロイ（と思します）です。

え？ああ、うん。そなんだよ。

最近、悪夢を見るんだ。

悪夢？悪趣味だなあ、人の悪夢を聞いたがるなんて。

好奇心は大事だけども、行き過ぎた好奇心は身を滅ぼすよ。

その夢はね、虫に、食われるんだ。

蛭や蛆なんかじゃないんだ。

蟻なんだよ。

蟻にね、一寸づつ、一寸づつ、本当に、気づかないぐらい、啄む様に、肉を巻り取られていくんだ。

けれど、その痛みは、うん、まるで何万本もの針を、一箇所に刺すようなんだ。

そんな痛みがね、体中で、何年も何十年も続くんだ。

延々と、蟻はむしり続けるんだ。体中のあつちこつちで。でもね、傷が治る速度と、蟻に巻られて肉が減つていく速度、あんまり変わらないんだ。

蟻はね、最初、体中を歩き回るんだ。

くすぐつたいんだよ。さわさわと、羽でなでられるみたいで。でも、いきなり激痛に包まれるんだ。

蟻はね、関節は襲わないんだ。

落ちちゃつたら、痛みが減るから。

まず、蟻は一匹だけくるんだ。

それでね、頭に卵を産み付けるんだよ。

するとあつといふ間に孵化してね、じつだらつ十四くらいかな、皮膚を破つて飛び出でくるんだ。

痛くは無いんだ。ただ、ちょっとピコッとするだけ。

最初はね。

生まれた十四もまた、卵を産むんだ。

前と同じ場所に、前と同じように、前より大きな卵を、前より深く。けど、生まれてくる蟻は、ますます小さくなるんだ。

これをね、10回ぐらいい繰り返すんだ。

その頃には、僕の全身を覆うぐらいに増えているね。

痛みも、体中が悲鳴を上げて、地獄に逃げ込むんじゃないかなっていうぐらい痛いんだ。

でも、蟻は止めてくれないんだ。

全身に、体中にだよ、散らばつていってね。

一呼吸置いてから、肉を喰いちぎり始めるんだ。

あ、そうそう、思い出したよ。

確かそれを、少しづつ僕の鱗のスペースに置いていくんだ。

ちょっとづつ、ちょっとづつ。

イラつくぐらいたくじと。

するとね、だんだん人ができていくんだ。

僕から巻き取られた肉片で。

気味が悪いたら無いよ。

皮膚で内臓ができるて、髪の毛が血管で、筋肉が髪の毛なんだ。

そして、髪の毛が骨で、内臓が皮膚なんだよ。

目玉や口は、ひっきりなしに体の表面を沼に浮かぶ枯葉のよつて動

くんだ。

気持ち悪いよ。てりてら光る肉の海に、ヌペツとした顔の一部が現れるんだ。

時々、筋肉になつた骨に引っかかつてね。

そつすると、ぶるぶると身を震わせるなまこのような指で、引っぺがすんだ。

顔のパーツは体中を漂つてゐつたりつへ。
じゃあ、顔には何があると思ひつへ。

脳みそと蟻がね、互いにむさぼりあつてるんだ。頭では。
その表面には、絶えず、鱗のよつな、でも、ぶよぶよした、蟻と脳
みそが透けて見える、肉色をした爪が絶えず生え続けてるんだ。
幾重にも重なつて、てんでばらばら、一枚一枚が好き勝手な方向に
向かつて。

互いに差し合つてね、時にはぽとりと落ちるんだよ。

爪がね。

そうすると、それはいつまでもピクピク、グニユグニュと動き続け
て、僕のほうに向かつてくるんだ。

当然、僕は逃げられない。

顔まで這い上がってきた爪が、僕の食い散らかされた顔に食い込む！
蟻に食い千切られるより、痛いことがあるなんて。
思いもしなかつたよ。

必死で、爪を振り落とそうとしたんだ。
けど、食い込んだ爪は落ちない。

するとそれは僕の顔中に生え始めたんだ！

恐ろしいよ。おぞましいよ。いまだに爪を見ると震えが走る。
必死で、必死でもがいていると、隣の、なんと呼ばうか、ぬうぬう
とした肉の塊がこつちへ来る。

そしてね、あの、熱っぽいよつな、冷やつこによつな、そんな手で
僕の頬を撫ぜるんだ。

それから、じーっと僕の目を覗き込む。

爪がのたうつ顔で、爪に覆われつつある僕の顔を。

目を疑つたよ。

覗き込んでいたのは僕だったんだから。
正気を失ったかと思った。

：でも、でもさーよく考えたらそれは当然だよね！

だってさ、あははははは、僕の体から毛り取られた肉片でできているんだから。

そいつは、僕に囁きかけるんだ。

何回も、何回もね。その内、蟻達も一緒に囁き始めるんだ。
僕が、その囁きに耳を傾けようとしたら、そこで、夢は終わって、
目が覚めるんだ。

わかってるよ、さうだとも。

くだらないことを、ただの夢だよ。

え？ 僕の頬にぶよぶよした桃色の蛆が付いてる？

気のせいだよ。

だって、たぶんそれは、爪だから。

昨日の夜ね、僕は彼から聞いたんだ。
ほら、僕の肉片からできた、彼だよ。

激痛に叫び身悶えながら。

彼は囁いた、人の幸せは人の不幸の上に成り立つって。
きっと、最初に蟻にあつたときには理解できなかつたと思つ。
でもね、昨日は理解できた。

思つたとうり、今朝、目が覚めても激痛は引かなかつたよ。
ほつぺたに、グジュグジュと蠢く、爪が生えていたから。
この爪をね、君にあげるよ。

きっと、蟻達も爪と一緒に君の元に行くと思つた。

それも、夢じやなく、現実でね。

彼らの望みはね、夢から外に出ることだったんだよ。
君も、気の毒だね。

知りたがりさえしなければ、僕も話さなかつたのに。

嘘じやないよ。きっと、他の人に話をしたさ。

途中で耳をふさいで逃げても良かつたのに。

じゃあ、今晚はいい夢が見られるといいね。

僕はきっと見られるよ

君これまで僕しか味わったことのない苦痛と絶望を味わえるんだから。

好奇心が満たされるだろう？

卷之三

ほら、ほら、日も翳つてきた！

君の元でこの蝶か！

新編 江戸の歴史

八八八八八.....！！！！！！！！！！！

人の幸せは不幸の上に

(後書き)

夢 悪夢 爪 爪の夢 蟻

他に考えてたタイトル。爪にしたら、手の続きっぽいから止めました。クオリティもガクッと下がってるから。こっちのが丁寧に書いたのに。やっぱり、思いつくまま場の雰囲気で書いたほうが、短編はできがいいのかも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6488c/>

蟻と爪

2011年1月15日21時50分発行